様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月 １３ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2019～2020
課題番号：１９Ｋ２３０４０

研究課題名（和文）一段活用を中心とする活用語の形態の歴史的研究

研究課題名（英文）A historical study of the morphology of inflectable words, focusing on upper monograde verbs

研究代表者
岡村　弘樹（Okamura, Hiroki）

京都大学・文学研究科・助教

研究者番号：９０８４８１１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では上一段活用に関する諸問題を扱った。まず、「瀬を早み」等に見られるミ語法の「み」を形容詞型活用の活用語尾でありながら動詞「見る」に由来するものと考え、「み」に様々な用法があったこと、「み」が他の活用語尾より先に成立した可能性があることを指摘した。続いて、『玉塵抄』を調査し、「二段活用の一段化」が、「読むる」や「言ふる」のような四段活用が下二段化した動詞に偏って見られることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、奈良時代における上一段動詞「見る」と形容詞型の活用との関係を検討し、中世に見られる「二段活用の一段化」に四段動詞が下二段化した動詞が積極的に関わった可能性を指摘した。一段活用は動詞の活用体系の中でも重要な位置にあるにもかかわらず、研究で重点的に取り上げられることは稀である。そうした状況において本研究の成果は、新たな見方を提示して動詞の形態に関する議論の活性化を促す役割を果たし、例外とされてきた事象の解明にも資するところがあると考える。

研究成果の概要（英文）：This study addressed two problems related to the upper monograde verb. First, it was considered that the ending -mi in an adjective, for example, “se wo payami” was an inflectional ending derived from an upper monograde verb “miru.” It was determined that -mi had various usages and was formulated before the other inflectional endings. Second, the “Gyokujinsho” was analyzed to show that the monogradization of bigrade verbs mainly occurred in lower bigrade verbs that had changed from quadrigrade verbs, for example “yomuru” and “ifuru.”

研究分野：日本語学・日本語史

キーワード：一段活用　二段活用の一段化　四段動詞の下二段化　形容詞型活用　ミ語法　抄物　動詞の自他

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

古典語における上一段活用・下一段活用（以下、両者を併せて「一段活用」と呼ぶ）は「母音が変化する活用語尾を持たない」、「所属語数が非常に少ない」という他の活用に見られない特徴を持つ。こうした特徴が動詞の中では例外的であり扱いにくいものと考えられるためか、動詞の活用に関する研究において一段活用が重点的に取り上げられることはほとんどなく、言及されても簡単に触れる程度で済まされることも珍しくない。

しかし一段活用には、上一段動詞「見る」のような、使用頻度が極めて高く重要な動詞が含まれる。また、「二段活用の一段化」を経て、現代語（共通語）では一段活用が動詞全体の三割を占めるようになった。そうした背景を踏まえると、動詞の活用の起源やその形態の変遷に関する研究において、はじめに示したような一段活用の特徴が意味するところの解明が必要であると考えた。

２．研究の目的

本研究では、一段活用の特徴の解明に繋がる目的として、

①奈良時代における一段活用の実態解明
②鎌倉時代から室町時代における「二段活用の一段化」進行状況の把握

の二点を掲げた。

①は、奈良時代における一段活用を動詞全体の中でどのように位置付けることができるかを探り、さらに、一段活用が従来想定されてきた以上に広範囲にわたって使用されていた可能性を検討しようとするものである。

②は、「二段活用の一段化」が二音節以上の動詞においても始まりつつあった中世において、いかなる資料のいかなる動詞に「一段化」した用例が多く見られるのかを調査しようとするものである。

３．研究の方法

本研究は前提として、研究代表者がこれまでに主張してきた「奈良時代には上一段活用の終止形末尾はイ段音であった」という仮説に基づいて進めた。これに基づけば、奈良時代において、例えば動詞「見る」の終止形は、現在のような「みる」ではなく、「み」という語形だったということになる。こうした観点から研究を進めることで、これまで明らかにされていない課題に対して新たな可能性を指摘できるところがあると考える。

続いて、具体的な研究方法として、①については『万葉集』を中心とする上代文献からの用例の収集と検討、『時代別国語大辞典上代編』や『日本国語大辞典第二版』といった辞書における記述の整理と用例に立ち返っての確認を中心として研究を進めた。

②については、大部で情報が多く得られることが期待される室町時代後期の抄物『玉塵抄』を利用して調査を進め、集まったデータと先行研究における指摘とを比較することで研究を進めた。

４．研究成果

(1)上代における四段活用、下二段活用、上二段活用の関係

〔雑誌論文〕の１件目では、上代における一段活用の位置付けを探る前提作業として、他の活用間の関係を、特に自動詞・他動詞の対応との関連に着目して検討した。動詞の自他対応については釘貫亨『古代日本語の形態変化』（和泉書院、1996 年）による 3 群への整理がよく知られている。それは以下のようなものである。

（Ⅰ）活用の種類による自他対応
　しる（知）四自－しる下二他、きる（切）下二自－きる四他、等
（Ⅱ）語尾による自他対応
　なる（成）自－なす他、うつる（移）自－うつす他、等
（Ⅲ）語幹の増加と語尾付接による自他派生
　ある（荒）自－あらす他、まぐ（曲）－まがる自、等

これら 3 群は、Ⅰ→Ⅱ→Ⅲの順に史的展開したとされる。

しかし、釘貫（1996）で動詞の活用に着目しているのは主に第Ⅰ群に対してのみである。そこで、自他対応に関係する全ての動詞の活用を調査して整理し直したところ、各群と活用との間に

以下のような関係が見出された。

Ⅰ：四段動詞の下二段化による自他対応
Ⅱ：活用に関連する特徴を見出せず
Ⅲ：上・下二段動詞から語尾がル／スである四段動詞を派生した自他対応

こうした傾向から、特に第Ⅰ群と第Ⅲ群とは、活用という点から見て対になる形式であることを指摘した。それに対して、活用に関係する形での第Ⅱ群と第Ⅰ群・第Ⅲ群との関連は、不明である。

また、上二段動詞にはそのほとんどが自動詞であるという特徴があるが、自他対応に関わる動詞の多くは四段活用か下二段活用である。上二段動詞がそうした特徴を有するにもかかわらず自他対応に関わることが稀であった背景には、四段動詞の連用形と上二段動詞の連用形との間には上代特殊仮名遣いで言うところのイ段甲類かイ段乙類かの違いしかなく、両者が形態上類似していたことが挙げられる。そのようなわずかな形態差では自他対応という役割分担を担いきれなかったために、四段動詞の上二段化といった形での自動詞派生は果たされなかったのだと考えた。

(2)上一段動詞「見る」と形容詞型活用との関わり

〔雑誌論文〕の 2 件目では、上代における一段活用の広範囲にわたる使用を検討するにあたって、形容詞のミ語法に注目した。「瀬を早<u>み</u>」等に見られる「み」は、「知りぬべ<u>み</u>」「得ましじ<u>み</u>」のように形容詞型に活用する助動詞の語幹にも付くことがある。そのため、この「み」というのは、形容詞を動詞化するための接尾辞であったとは考えにくく、形容詞型活用の活用語尾の一つと考えられる。

しかしミ語法の用法は、ミ語法でない形容詞（以下、非ミ語法と呼ぶ）と異なるところも見られる。例えば、『万葉集』では非ミ語法の連用形は修飾法か中止法に偏るのに対して、ミ語法は大半が序列法であって修飾法がないとされる。こうした傾向は形容詞よりもむしろ動詞に通ずるものである。また、係助詞「かも」が下接した例にもミ語法と非ミ語法とで違いが見られる。非ミ語法＋「かも」の場合は多くがシク活用形容詞であり、「かも」はク活用形容詞の連体形、シク活用形容詞の連体形、シク活用形容詞の語幹のいずれかに下接する。それに対してミ語法＋「かも」の場合はほとんどがク活用形容詞であり、「かも」は従来連用形と考えられてきた「み」という形に下接する。

こうしたミ語法と非ミ語法との違いを説明するにあたって、蔦清行「ミの世界」（『国語国文』73 巻 12 号）で詳しく検討された、ミ語法の「み」は上一段動詞「見る」に由来するという説を援用した。先に述べたように「み」は形容詞型活用の活用語尾と考えられるので、この「み」というのは動詞「見る」が形容詞型の活用体系に取り込まれたものということになる。そのため、一方では形容詞としての特徴を備え、もう一方では由来する動詞の特徴が現れることがあったために、ミ語法には非ミ語法と異なる用法も見られるのである。

また、研究代表者のこれまでの研究では、一段活用はかつていずれの活用形においてもイ段音のままの形を保っていたと考えている。以上の見解に基づいてミ語法の例を見直すと、ミ語法には多くの用法があった可能性が指摘される。具体的には以下の通りである。

〈イ〉形容詞連用形の活用語尾「く」と変わらない用法（修飾語性連用用法）
〈ロ〉原因・理由を示す用法や「～と思って」と訳されるような例（述語性連用用法）
〈ハ〉「み」に助詞「と」が下接した「みと」の例（終止用法）
〈ニ〉「早<u>み</u>早瀬」（万 2706）、「恋し<u>み</u>妹」（万 3714）等の用法（修飾語性連体用法）
〈ホ〉「み」に情意的な意味が見出される「みかも」の例（述語性連体用法）

さらに、ミ語法の「み」が動詞「見る」に由来するならば、「み」という活用語尾は、形容詞によって表現される事態を視認する形式であったということができる。こうした視覚による形式というのは原初的なものであることも考えられることから、活用語尾「み」が連用形活用語尾「く」、終止形活用語尾「し」、連体形活用語尾「き」より古くに成立した可能性も想定されることを指摘した。

以上の(1) (2)が、研究の目的①に対する研究成果である。それに対して、以下の(3)は、研究の目的②に対する研究成果である。

(3)『玉塵抄』における「二段活用の一段化」

従来の抄物を対象とする研究では、中世における「二段活用の一段化」はア・ハ・ワ行下二段動詞のヤ行化（例：心うる→心ゆる、教ふる→教ゆる、植うる→植ゆる）と連動する形で開始されたと考える説が主流である。しかし、狂言台本や近松世話物を対象とした先行研究では一段化例と非一段化例の用例数や一段化率が示されたものがあって、それらの資料における「二段活用の一段化」の詳細を知ることができるが、抄物を対象とする先行研究ではヤ行化した動詞が一段化した実例が複数示されるだけで、一段化率が示されたものがない。そこで、〔学会発表〕の 1

件目では、『玉塵抄』（全 55 巻のうち巻 1〜3、10、20、23、43、53、54 を調査）におけるア・ハ・ワ行下二段動詞のヤ行化と「二段活用の一段化」の進行状況を調査した。

まず、ア・ハ・ワ行の下二段動詞は、その 90%近くがヤ行化していた。さらに、ヤ行化していなかった例のうちの一部は漢文を訓読した箇所の例であった。漢文訓読では古形が残存しやすいため、ヤ行化していない例が複数見られたのだろう。『玉塵抄』において、ア・ハ・ワ行下二段動詞のヤ行化は相当進行していたことが分かる。

一方、下二段動詞のうち一段化していた例は 4.8%、上二段動詞のうち一段化していた例は 1.9%に留まり、ア・ハ・ワ行下二段動詞のヤ行化と比較すると一段化はほとんど進行していなかった。一段化していた具体的な動詞は「尽きる」、「読める」、「言へる」、「捨てる」、「寝る」、「迎へる」であって、このうちヤ行化と関わる動詞は「迎へる」の 1 語のみである。また、一段化した例のうち 9 割近くは「読める」、「言へる」といった、四段動詞が下二段化した動詞が一段化したものであった。なお、調査範囲内では、「言へる」が「言ふる」とあった例は 1 例もなく、「読める」が「読むる」とあった例は 1 例のみであった。

『玉塵抄』に多く見られる「読める」を、「読む」に助動詞「り」が付いたものと考える先行研究もある。しかし、室町時代後期の抄物において助動詞「り」が頻用されたとは考えにくい。また、『方丈記』『宇治拾遺物語集』『十訓抄』『徒然草』『海道記』『東関紀行』「虎明本狂言集」における助動詞「り」を調査すると、そのおよそ 3 割前後が連体修飾用法である。しかし、『玉塵抄』における「読める」は 95%以上が「ヨメルゾ」「ヨメルラウゾ」といった文末における終止用法であり、「読める」の「る」を助動詞「り」と考えると、中世における助動詞「り」の使用実態とも合致しないということになる。中には四段動詞「読む」＋助動詞「り」という例も混じっているかもしれないが、基本的に「読める」は四段動詞「読む」が下一段化したものと考えて良いだろう。

以上より、『玉塵抄』を調査範囲とする限り、「二段活用の一段化」は四段動詞が下二段化した動詞に多く見られると結論付けられた。四段動詞を元とする動詞に一段化例が多く見られた背景として、同じく中世に新たに成立したと見られる動詞「ちぶ（禿）」には複数の一段化例が中世の文献において確認されることから、成立が時代的に新しいために四段活用から下二段化した動詞も一段化しやすかったのではないかと考えられる。ただし、今回の調査は『玉塵抄』の一部分に留まることから、『玉塵抄』全体の調査や他文献における調査を引き続き進める必要がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 岡村　弘樹	４．巻 88-8
２．論文標題 上代における自他対応と上二段活用	５．発行年 2019年
３．雑誌名 国語国文	６．最初と最後の頁 22-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 岡村　弘樹	４．巻 90-3
２．論文標題 形容詞型の活用とミ語法	５．発行年 2021年
３．雑誌名 国語国文	６．最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 岡村　弘樹
２．発表標題 「二段活用の一段化」を捉え直す
３．学会等名 京都大学国文学会（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関